

たず、五稜郭の堀割を請負った松川弁之助によるものと思うが、松川弁之助が関係した弁天台場、地蔵町の箱館産物会所倉庫にも笹岡の瓦が使用されていたと考えられる。

瓦屋根を葺く作業は、屋根葺、屋根葺衆と呼ばれる人達の仕事で、繫葺、土葺、引掛葺があり、大棟、降棟、隅棟の鬼瓦、棟葺、鎧瓦など瓦の種類が30種から40種もあって、特異な屋根の構造によって屋根葺衆は専門職人が要求された。瓦葺は、上打職人・瓦師・鬼師・弟子の職場の衆と窯親方・弟子・人夫の窯小屋の衆による屋根葺衆が担当した。五稜郭の瓦葺も笹岡からかなりの人数がきて長期間滞在したので、この頃に松前徳利に入った焼酎が多量に運び込まれていたのである。

耐寒耐雪の笹岡瓦は、新潟の新発田城、明治2年の旧新潟税関舎など主要建造物にみられ、新潟県内や福島県などに笹岡瓦の製造が広まっていった。青森県では弘前に石黒善太郎が瓦製造をはじめると、北海道では石狩の札幌字月寒に石黒善吉が明治30年に瓦工場を設立し、石狩の砂川では石黒林三郎が明治35年に瓦製造をはじめている。

明治30年頃の札幌は、新潟県人による今井呉服店など瓦屋根店舗も多くなるが、明治33年に旭州師団兵舎ができると、石黒林三郎が屋根瓦を請負った。これは、十勝漁場営業の兄石黒林太郎が手

引きしたもので、林三郎は旭州師団のほか新潟の高田師団兵舎も請負っている。

笹岡瓦の石黒系の焼瓦には、丸石、山石、ちがい山石、角石、丸真の刻印が付けられているのがある。石黒系のほかは宮の下の丸四、山崎の丸一、丸庄、丸甚など窯名による刻印は41を数える。

十勝の石黒林太郎から新潟笹岡の石黒と松前徳利、笹岡の瓦を述べてきたが、新潟の鮭建網が十勝の鮭建網に用いられただけでなく、北洋漁業では函館に新潟出身の製網業者が活躍していた。あまり注目されていなかった北海道の瓦も瓦造りに適した粘土がなく、本州から移入された瓦が多くたが、古建造と瓦の考察に参考となれば幸である。

### 参考文献

『新潟市史 資料編2 近世I』 新潟市史編さん近世史部会 平成2年3月

『新潟市史 資料編5 近代I』 新潟市史編さん近世史部会 平成2年12月

『函館市史 通説編第一巻』 函館市 昭和55年3月

川上貞雄「越後・佐渡の古代・中世窯」 『日本やきもの集成 2 東海甲信越』 平凡社 1982年

須藤隆仙『函館の歴史』 東洋書院 昭和55年

## ニタトロマップチャシから見たチャシの初源的形態

後 藤 秀 彦

### I

かねてより、チャシに関する調査研究は道内外の研究者によって鋭意進められてきたところであるが、その多くは分布や個別チャシ跡の紹介にとどまり、その機能や変遷、そして歴史的な位置付けに関する研究の数は少ないのが実情である。それは、このチャシに関する研究の歴史が浅く、個別チャシのデータの集積が今日的な課題であったからにほかならないが、そうした中においても初期においても鈴木公雄（1965）や本堂寿一（1977・1978）など道外研究者の研究に見るべきものが多かった。そうした中で、各地域のチャシの実情やいくつかのチャシの発掘データ等が示されるに

及んで多くの論文や一般向けの啓蒙書が出版されるようになり、チャシに関する研究も大きく変わってきたと言える。

この中で、チャシの初源的形態や基本形の抽出については、松田猛（1973）が「発生要因の芽生えは縄繩文期にあり、発生したのは人口の増加した擦文期」と主張し、藤本英夫（1980）が「擦文時代の少なくとも後半」と主張しているほかは目立った主張はない。一方、宇田川洋（1980）は中近世のアイヌ文化を3期に分け、14～15世紀を「前期アイヌ文化」とし、カムイチャシの成立期、16世紀前後を実在のチャシの成立期との見解を示している。

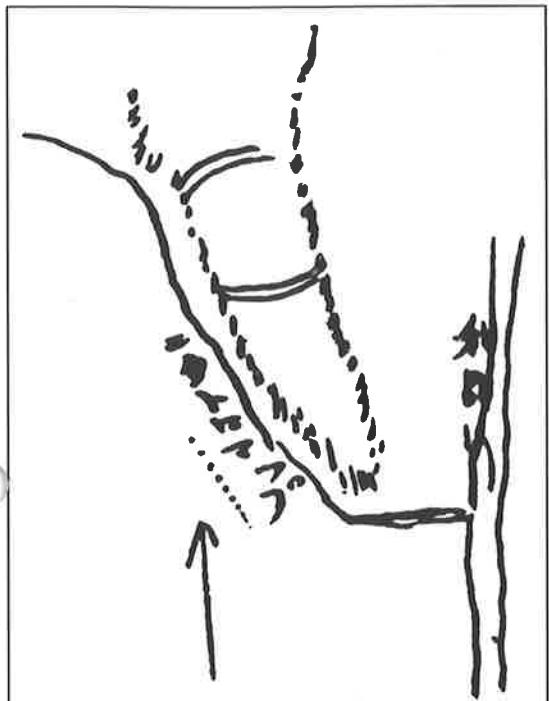
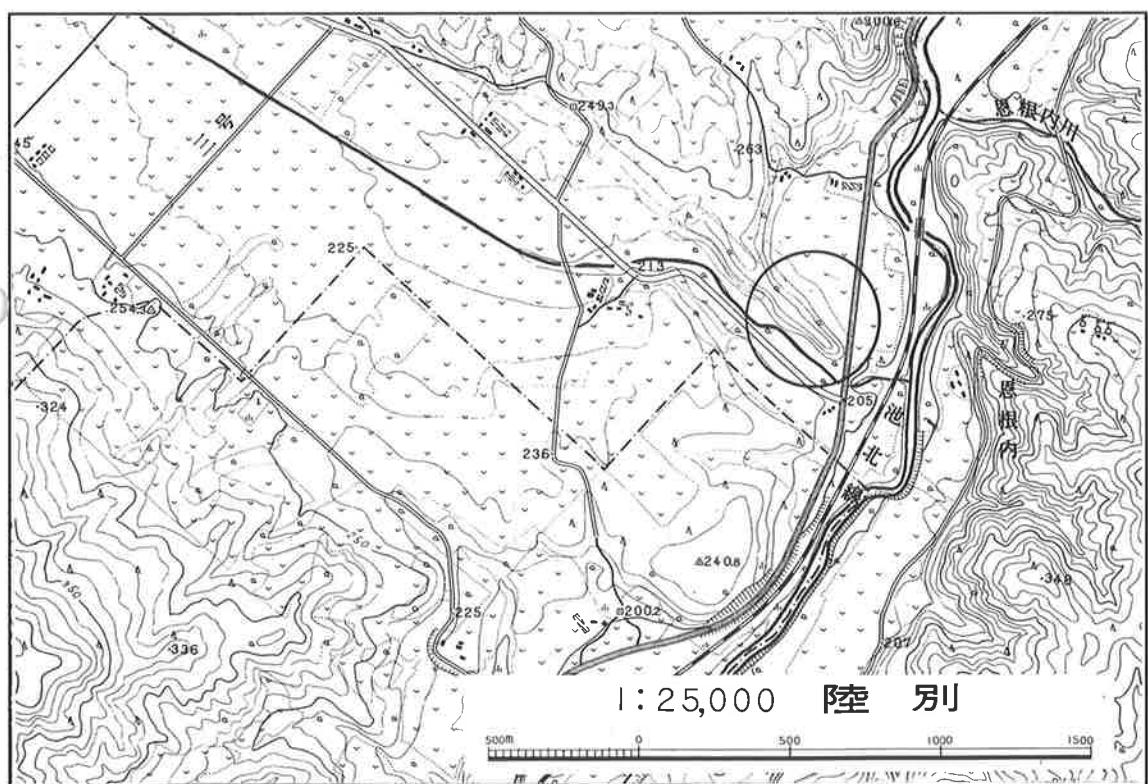


Fig. 1 ニタトロマップチャシ（宇田川校註、1981a）

この3者間には大きな主張の差が見られるが、いずれもチャシの発生時期を示唆したものでありその最初のチャシがどういうものであったのかという点については触れていない。ただ、宇田川洋はチャシの編年を考える中で孤島式・丘頂式のチャシが最も古いとの見解を示し、これに先だって「カムイチャシ」の時代があると言っているのみである。しかし、これもチャシのオリジナルの形態を明らかにしたものとは言い難く、以前からこの点について筆者は関心を持っていたところであるが、先般、陸別町ニタトロマップチャシ跡などを調査する機会に恵まれたので、これまでに知り得た点をまとめて識者のご批判を受けたいと考えているところである。

## II

ニタトロマップチャシ跡は足寄郡陸別町字闕1号に所在するチャシ跡である。このチャシ跡の存在は以前から知られていたが、去る1991年6月18日このチャシ跡を訪れる機会を得た。この調査は



Map 1 ニタトロマップチャシ跡付近地形図  
(この地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「陸別」を複製したものである)



Fig. 2 ニタトロマップチャシ跡地形図

北海道文化財パトロールの一環として行ったものであり、陸別町教育委員会社会教育係長秋山勝幸氏（当時）が同行し、種々ご指導を下さった。ここに明記して感謝申し上げたい。

さて、このチャシ跡の存在が識者に知られるようになったのは、比較的古いものである。幕末期の紀記類には見えないが、いわゆる『河野常吉ノート』には明治39年7月10日の調査として本チャシ跡が記録され、略図とともに「十勝国河東郡トマム原野ニタトロマップ北岸丘岬の中部 前のチャシより大にして、約十五間の幅あり。前後二ヶ所に弧線を以て仕切り砦を設く」（宇田川校註、1981a）（Fig.1）とある。この『ノート』にはユクエピラチャシ跡の記載もある。おそらく、この記事がこのチャシ跡に関する最も古いものであろうと思われるが、同氏の「チャシ即ち蝦夷の砦」

にはこのチャシの記載はない。

その後、どのような理由かわからないが、長年にわたってこのチャシに関する記述は見ることができず、次に見られるのは、いわゆる『河野広道ノート』においてである。1951年に知里真志保、更科源藏らとこの地を訪れた同氏は「関神社丘上のチャシ」、「陸別中学校前のチャシ」などとともに本チャシ跡を取り上げ、河本富士男の談として「新田川（Nitaromap）付近のチャシ」を上げ、13号の片山の向い側の山にあるとした（宇田川校註、1981b）。

この二つの文献の間には45年間の空白があるが、いずれも各々の調査や聞き取りによる知見であり二人の間に情報の交換はないようである。

しかし、それでもなおその後の北海道教育委員会発行の『北海道遺跡埋蔵文化財一覧』や

『埋蔵文化財保護の手引』（北海道教育庁社会教育課、1967・1971）中の遺跡地名表にこのチャシ跡の名はない。

1973（昭和48）年、北海道教育委員会によるチャシ跡の分布調査が全道一斉に行われた。陸別町を担当した辻秀子氏は本チャシ跡を踏査し、「成人の森チャシコッ」として「丘先式 臨川性利別川とニイトロマップ川にはさまれた小高い丘の丘陵の先端に位置する。標高 285m、利別川との比高45mを計る。北西部より利別川に向って伸びるせまい舌状地に3条の直状壕によって区切られている。突端部の壕は巾3m、深1.8m、後方に40m離れて巾6m、深2mの壕、さらに後方28mの所に巾3m、深さ1mの壕が築かれている。いずれも利別川に面しており、壕の両側は急斜面となっている。丘陵地斜面には植樹がなされている。約300m離れて北東部にもチャシが存在する」（辻、1973）とカード化した。1977（昭和52）年には本堂寿一が全国城址一覧の中で「ニイトロマップ川口チャシ」を掲載し、「丘頂利用の偏円形状単郭型チャシ」との説明を加えているが、同時に「成人の森チャシ」も記載し（本堂、1977b）、同一チャシをめぐる名称の混乱が見られる。

1980（昭和55）年には全道のチャシ跡を網羅した『日本城郭大系1』が刊行され、本チャシの執筆を筆者が担当し、これまでの知見をまとめた（後藤、1980）が、この中でチャシ南側の裾部を流れるニイトロマップ川のアイヌ語解釈について触れ、ni-o-tomam-oma-p 「寄木・多い・低湿の荒地・ある・もの（川）」とした。また、1982年、チャシの形態分類を試みる中で本チャシ跡を取り上げて、第III群a類に分類し、両側に沢などのある狭長な台地上にあり、周壕と直線壕の組み合わさったタイプとした（後藤、1982）。

以上が本チャシ跡の調査に係わる概要であり、研究の位相である。

### III

このチャシ跡は、十勝川の第一支流利別川の上流域、ニイトロマップ川との合流点に近く、南東方向に突出した標高230mの狭長な丘陵上に所在する。チャシの両端は急峻な傾斜面で、チャシ直下は利別川およびニイトロマップ川の氾濫原となっており、チャシとの比高は約40m、北東方向約

300mの個所には利別川に面して成人の森二号チャシ跡（ウエンシリチャシ跡）がある。

チャシ跡に残されている壕は、これまでの報告を見ると2~3本である。しかし、このチャシ跡の壕を仔細に検討してみると、チャシ最先端部から2~3m付近に幅2mほどの浅い帯状の低地が認められ、これもおそらく壕であろうと思われ、そうすると、このチャシの壕は見かけ上4本となる。

さて、この4本の壕は次のような組み合わせの中で配置されているようである。まず、内側の2本はチャシの内郭を形成する。この壕は狭長なチャシの尾根にそって隅丸長方形状に構築される。この隅丸長方形の短辺がチャシの明瞭な壕としてチャシ上に残されている。また、長辺壕は短辺壕より低い標高位置において、一見テラス状に構築されているが、西側の一部にはそれが途切れで認められない。次に、外側の2本であるが、尾根基部側のものは現状においても壕の存在は明瞭であり、壕の両端部において、壕は先端方向に尾根に沿ってカーブしている。一方、最先端部の浅く残された壕は直線的である。本来、この2本の壕はセットで内郭を囲んでいたものと考えられるが、チャシ両側の斜面は急であり、この部分の様相は明らかではないが、その沢側のテラス状に形成された壕（？）を見逃してはならない。

### VI

さて、いずれにしても、このチャシの壕は狭長な丘陵の先端部付近に内郭を形成し、それを囲むように外壕を掘削して構築されたものと考えられるが、一応、河野広道の言う「丘先式」のカテゴリーに含まれるものと考えられる（河野、1958）。チャシの2本の内壕は連結して構築する意思が認められ、さらにはそれを囲むように外壕が構成されているという壕の配置状況から考えて、お供え山形の丘頂式のタイプを念頭に置いていることは明らかであり、しいてはこれが丘先式チャシの先駆的またはチャシの初源的形態である可能性が強い。宇田川洋はかつてチャシの変遷を丘頂式・孤島式→丘先式→面崖式と考えた（宇田川、1980）。この一連の流れは他の史実などとも考え合わせてみても妥当なものであると考えられるが、いずれのチャシもおそらく丘頂式のいわばオタフンベ型

のチャシを基本として構築されたものであることは疑いなく、同じ趣旨の指摘を既にしたことがある（後藤、1983a）。

このようにチャシの中には前述したような先駆的あるいは初源的形態を暗示していると考えられるような壕配置をしているチャシがほかにも認められる。

例えば、浦幌町霧止山チャシ跡、アツナイチャシ跡、芽室町丸山チャシ跡などがこれで、丘陵を切断するように複数の壕が築かれているものである。筆者の単例で申し訳ないが、霧止山チャシ跡は基部が細く、先端部の広がっていく緩傾斜の舌状台地の基部に2本の直線壕の築かれたもので、壕に囲まれた部分はその外側より一段高く作られており、横から見るとお供え山型のチャシそっくりである（後藤・佐藤、1978）。

また、アツナイチャシ跡は厚内川左岸の高位に築かれた丘先式チャシである（後藤、1983b）。このチャシの所在は白糠丘陵の最西端に当り、西面した急峻な尾根の一つに築かれている。比高は約30m、壕は尾根を切断するように長さ20m、幅6～7m、深さ4mの規模で築かれており、その壕からチャシ前面方向に伸びたテラス状の遺構がチャシ本体を取り巻いている。このチャシの場合もその平面観はニタトロマップチャシなどと同じくオタフンベ型であり、立面観も極めて似た形態を示すものである。

丸山チャシは、美生川の右岸の小丘上に築かれたチャシであるが、ここも平面観ではオタフンベ型の壕が築かれている。これらを見ると壕は隅丸長方形状に構築されており、長辺は短辺に比べて低い箇所に築かれるのが通常である。

Fig. 2に示した4基のチャシも同様の例である。1は釧路町アッチョロベツチャシである。このチャシはアッチョロベツ川河口右岸の三方が急斜面をなす険阻の地に築かれたチャシで、平坦な舌状台地の2カ所に壕を設け、さらにこの壕をつなぐように急斜面に幅1～2mの段が造られているものである（澤、1980）。このチャシの場合、丘先式チャシの立地の上に丘頂式タイプのチャシが構築されているもので、丘頂式が丘先式の先駆をなすものであることを示している一例である。

2は千歳市のシュトクンネのチャシである。千歳川に並行する舌状台地上に、相対する2条の弧

状壕によって構成されている（福田、1980）。おそらく、この壕は連結されていたものと推定され、このチャシの場合、丘先式チャシの立地箇所に周壕を築いたものであるが、アッチョロベツチャシのように壕で囲まれた内郭の部分は盛り上がってはおらず、壕内外での比高差は認められない例である。

3は中川町のオフィチャシである（鈴木、1980）。このチャシも丘先式のタイプであるが、先端に向かって半円状の壕が築かれ、チャシ中央部の段と合わせて円形の壕を形成していたものらしい。この場合も郭内とおぼしき部分は他に比して高くなっている、アッチョロベツチャシとシュトクンネのチャシの中間の形態と考えられる。

4は平取町のポンカンカンチャシである（中村、1980）。このチャシはその様相からニタトロマップチャシに最も近似しているタイプであるが、壕の組み合わせは異なるかもしれない。

これらのチャシの造りは一見して丘先式のようであるけれども、明らかに丘頂式のスタイルをひきづっており、狭長な丘の先端部付近を利用して構築されるものである。

丘頂式のチャシがチャシの中でも最も古いタイプに属するとの見解は、かつて知里真志保がアイヌの山上の遺跡として①祭場②墓場③チャシがあり、それらはすべてチャシ・コッの名で呼ばれているという指摘、さらには「パセ・オンカミ（重要な礼拝）は今こそ遙拝の形で行われるけれども、古くは直接その山へ登ってそこにあった祭壇の前で行われたと考えられます」という見解に合致するものであり、かつて山上にあった礼拝の対象物が次第に里へ下ってきたという状況を示すものと考えられる（知里、1953）。

したがって、初源的なチャシの形態を知るために、いわゆるモイワ、タブコブ、カムイヌプリ、チルラトイ、カムイエロキなどの地名が一層重要な役割を果すが、考古学的にはタイポロジカルな立場から丘先式に先立つ丘頂式の存在を指摘することができる。

## V

ニタトロマップチャシの知見をもとに、丘先式のチャシと丘頂式のチャシの関わりを道内に所在する他のチャシの例も引きながら考察を加えてき

た。この論のベースは、以前「チャシの形態分類に関するメモ」（後藤、1982）を書いたときの考え方と同じである。今回、取り上げたチャシのタイプが丘頂式と丘先式の間をとりもつタイプのチャシとなるものと予想されるが、壕は次第に簡素となって、面崖式になると再び複雑な構造のものへと変化していく流れが考えられ、この視点は平面形の確認とともに立面形の観察が不可欠となってくる。このことは、宇田川洋（1985）がチャシの分類の中で「外的効果」と呼んだ壕のありかたと関係してくるかもしれないが、また、郭内と郭外の差をきわだたせるための効果を狙ったものと考えられ、とりわけ郭内の造成状況が重要となる。

当然のことながら多くのチャシは見上げられた

り、真横から観察されたりするものではあるけれど、そこに存在する意識はチャシの本来持っているはずの伝統的なものであり、その意識がチャシ構築時の意識にも繁栄して、ここに紹介してきたようなチャシの構造に変化してくるものと思われる。

このことは、本質的にチャシの壕の配置の問題であるのか、郭内の縄張りの問題であるのか分からぬのが、チャシの変遷や編年を考える上でさらに発展させなければならない課題であり、より多くのデータの蓄積と分析を必要とする問題であると考えられ、多くの課題を解決する一助となるであろう。

## VI

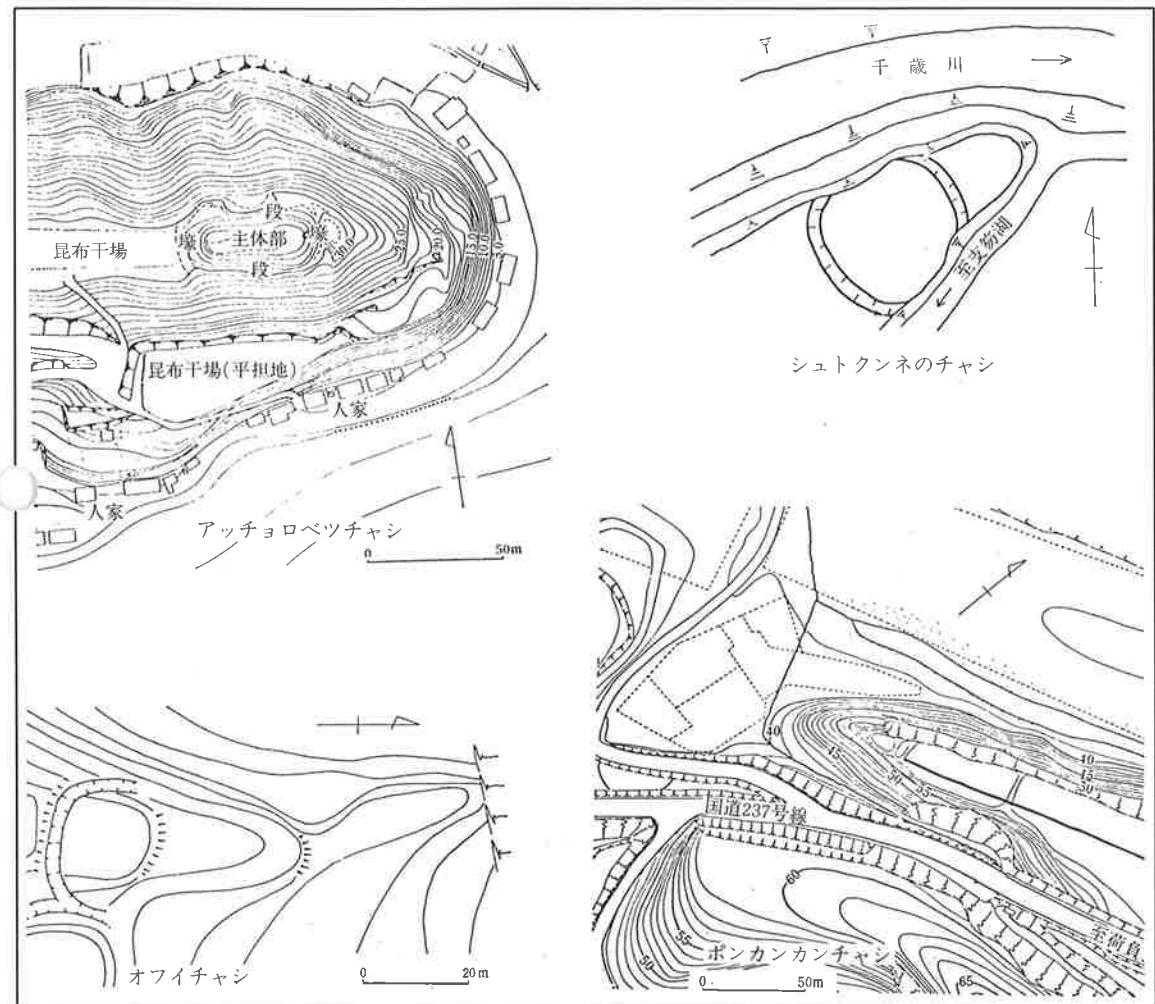


Fig. 3 ニタトロマップチャシと同種のチャシ

筆者の周辺に所在する数少ないチャシ跡資料をもとに論を進めてきたが、まだ、解決しなければならない問題は少なくない。近年、チャシの形態分類または型式分類の作業はそれなりに進展しつつあり、それまでの分布論等とも合わせてかなりの成果を収めつつあると考えられる。しかし、最も本質的な課題であるチャシの機能については不明な点が少なくなく、いわばチャシのソフトの部分が明らかとなっていないわけで、この点が最も大きな課題であり、16世紀～18世紀にこのチャシ群が果たした歴史的・社会的・地域的・民族的役割の解明が待られるところである。

しかしながら、当面はチャシの序列を考えるような基礎的な作業を繰り返す必要があるものと考えられ、そのためにはティピカルなチャシの抽出が不可欠であるし、チャシの基本形や初源的形態の把握が求められるであろう。

今回のニタトロマップチャシ跡の調査では地元教育委員会のご協力を得たが、この小論をまとめるにあたり、日頃種々ご教示をいただいている沢四郎・石橋次雄・斎藤省三・宇田川洋の各先生にお礼を申し上げ、ペンを置きたい。

(浦幌町郷土博物館学芸員)

### 引 用 文 献

- 宇田川洋 (1980) 『アイヌ考古学』 教育社  
 宇田川洋校註 (1981 a) 『河野常吉ノート 考古篇1』 北海道先史時代遺跡 北海道出版企画センター  
 宇田川洋校註 (1981 b) 『河野広道ノート 考古篇1』 北海道東北部の考古学的調査 北海道出版企画センター  
 宇田川洋 (1985) 「チャシの形態についてのメモ－標茶町の場合－」『標茶町郷土館報告』1 標茶町郷土館  
 河野広道 (1958) 「先史時代篇」『網走市史』上  
 後藤秀彦・佐藤芳雄 (1978) 「霧止山チャシ跡について」『浦幌町郷土博物館報告』11  
 後藤秀彦 (1980) 「成人の森チャシ」『日本城郭大系1』北海道・沖縄 新人物往来社  
 後藤秀彦 (1982) 「チャシの形態分類に関するメモ」『浦幌町郷土博物館報告』19  
 後藤秀彦 (1983 a) 「チャシの基本的型式に関する予察」『十勝考古』6 十勝川流域史

### 研究会

- 後藤秀彦 (1983 b) 「浦幌町で発見したチャシ2例」『浦幌町郷土博物館報告』21  
 澤四郎 (1980) 「アッショロベツチャシ」『日本城郭大系』1 新人物往来社  
 鈴木公雄 (1965) 「『チャシ』の性格に関する一試論」『物質文化』6 物質文化研究会  
 鈴木邦輝 (1980) 「オフィチャシ」『日本城郭大系』1 新人物往来社  
 知里真志保 (1953) 「ユーカラの人々とその生活(1)－北海道の先史時代人の生活に関する文化史的考察－」『歴史家』2 北海道歴史家協議会  
 辻秀子 (1973) 「成人の森チャシコツ」『チャシ調査カード』  
 中村福彦 (1980) 「ポンカンカンチャシ」『日本城郭大系』1 新人物往来社  
 福田友之 (1980) 「シートクンネのチャシ」『日本城郭大系』1 新人物往来社  
 藤本英夫 (1980) 「概説」『日本城郭大系』1 新人物往来社  
 北海道教育庁社会教育課 (1967) 『北海道遺跡埋蔵文化財包蔵地一覧』  
 北海道教育庁社会教育課 (1971) 『埋蔵文化財保護の手引』  
 本堂寿一 (1977 a) 「石狩川流域のチャシコツ」『石狩川中流域の先史遺跡』  
 木堂寿一 (1977 b) 「全国城址一覧－蝦夷－」『探訪日本の城1 奥羽道』 小学館  
 本堂寿一 (1978) 「北海道におけるチャシ遺跡－諸問題－その築造時期をめぐって－」『歴史手帖』6-11  
 松田猛 (1973) 「釧路地方におけるチャシコツ」『釧路川流域の遺跡』

1991年11月16日	印 刷
1991年11月20日	発 行
編 集	後 藤 秀 彦
発行責任者	石 川 安 次
発 行 所	浦幌町郷土博物館 北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地1
印 刷 所	大同出版紙業株式会社 北海道帯広市西7条南6丁目